ルルブルー

流れゆく砂と、混じる煙草の煙を目で追いながら、イツキは空を見上げていた。ノイズの中に青い鳥の姿がないか、何度も何度も確認する。
それで見つかればいいのだが、雲一つない中でもその小さな影を見つけるのは容易ではない。
わかっていても、見上げずにはいられない。
ぼさぼさの髪をかき混ぜながら、しぶしぶ歩き始めた。こういう時に限って車は通らない。街の屋根が小さく見えているが、中々大きくならないのがもどかしい。
じりじりと太陽が体を焼き、じんわりと汗が染み出す。オアシスはもちろん、木陰どころかサボテンも石もない。鮮やかな風紋広がる砂漠だけが道を作っている。風が吹くたびに道筋を変え、行き先を黄金で誤魔化される。
看板でも落ちていないだろうかと、今度は地面を見つめる。砂がどこかへ流れ、消えていく。甘い煙草をゆったりと吸い込み、吐き出した。煙すらどこかへ消えていく。
何もかも流れ、消える中でイツキだけが異質な存在のようだ。

何とか街にたどり着いた時、日が傾き始め、空はカクテルのように黄色い波が揺れ始めていた。朱にたなびく雲が冷たい空気を運んできてくれる。
イツキは汗ばんだ首元を緩め、町並みを歩いた。子どもたちがねずみのように駆け抜け、それぞれの家に飛び込む。露店はまだ開いているが、ちょうど時間帯が悪いのか、暇そうにあくびをしては売り物を片手に遊んでいる。艶めくオレンジやりんごが喉の渇きを思い出させてくれる。
夕飯にするにはまだ早いが、混雑しないうちに食堂に入ることにした。空腹感はないが、喉がぱさついている。グラスホッパーがあればいいが、大抵の食堂にもバーにもなく、名も知らない小さな街ではあるとは思えない。だとしたら、冷たいビールでも飲もうかと今日のメニューを考える。とはいえ、あまり路銀がないので大量に注文することはできない。
宿のことも考えなくてはならない。見たところ、一件のぼろ宿があるぐらいで、娼館はないようだ。冷たい夜を過ごすには女の肌がちょうどいい。しかしないとなると、どこかで一晩買うしかないが、そんな女がいるようにも見えない健全な街だ。
自然とため息が出た。ないものはしかたないが、それでも体の芯はいつでも疼いている。
ブルーヘブン。
青い天国、青い鳥。イツキを招待する青。
あれが見つからない限り、体はずっとこうだと、思っている。
青い天国を知る女がいた。それを知らずに抱いたが、知っていても知らなくても同じ、満たされるものはなかった。彼女は青い鳥ではないのだ。
知っているだけではだめだ。ブルーヘブンそのものでなければ、欲望は満たされない。
そもそも、この渦巻く欲はなんだろうか？
何を求めているのか……イツキは自身がわからないでいた。
それでも、喉が渇くようにブルーヘブンを求めていた。

イツキは自嘲すると、食堂の扉を開けた。人はまばらで、ほとんどいない。ウエイトレスがさぼっていたが、すぐに立ち上がって「いらっしゃいませ」と裏声で言った。
「ビールと何かつまみ。一番安いので」
「かしこまりました」
ウエイトレスは二十歳ほどの若い女だ。イツキは猫のようににんまりと笑うと、頬杖をつきながら女の顔を覗き込んだ。
「なあ、今夜暇？寂しい俺を慰め」
「他所でどうぞ」
「……」
素早い対応にイツキはそれっきり黙りこむ。
ウエイトレスはエプロンを揺らしながら立ち去り、待つことなくビールが運ばれた。
「じゃあさ」
「私、軽い男は苦手なんです」
「じゃなくてさ。青い鳥、知らねえか？」
「……なんですか、それ」
「ブルーヘブンっていうんだけど」
「知りません」
ウエイトレスを呼ぶ声に、女は言ってしまった。次につまみがきたが女は何も言わなかった。もう次の客の相手をしている。イツキはため息混じりにビールを舐めた。うまくもまずくもない苦味が走る。
次第に客が増え席が埋まり始め、イツキの席も相席になった。砂を掘り続ける職……サンドワームだろう、くたびれた作業着と日に焼けた肌がまぶしく、隆起する肩がなんとも逞しい。砂でくすんだスコップを立てかけるとウエイトレスを呼び、ビールを頼んだ。
「よう、兄さん。旅人かい？」
「旅みてぇのはしてるが、旅人じゃねえな」
「そりゃ妙な話だ」
「俺は単なる遊び人。探し物してるんだよ」
「探し物？砂漠に落としたのなら、俺が探してきてやるよ。なんといっても、砂の中を探しまくるサンドワームだからね」
快活な笑みを浮かべると、自分の拳を見せた。イツキのそれよりも一回りも大きい手は岩のようにごつごつしている。
「残念ながら、砂には落ちてねーんだ。空にあるのさ」
「空？そいつは残念だ。空は管轄外でね」
「しかも飛んでどっかいっちまうもの」
「雲？」
「いんや、鳥さ。青い、青い鳥」
サンドワームの男はウエイトレスと同じ、不思議そうな表情を浮かべた。案の定の反応なので、

イツキは特に気にせず、最後の一口を飲んだ。もう生ぬるく、グラスは水滴で濡れている。
「鳥なぁ。いろんな鳥がいると思うが……。青い鳥じゃなきゃだめなのか？」
「だめだね。それも、天国の名前がついてるやつじゃねえと」
「天国？青い鳥に、天国。そいつは縁起がよさそうだ」
男は大声で笑うと、届いたビールを喉を鳴らしてうまそうに飲んだ。一気に半分減る。ウエイトレスを呼びとめ、もう一杯注文した。
「しかし、妙なもんを探してるね、兄さん。それだけを探して旅を？」
「そうさ。青い鳥だけを探してんの。ロマンだろ？」
「ロマン……どうだろうねえ。俺はどうにも、そういった曖昧なものは苦手だ」
「そいつは残念。そうそう」
イツキはポケットからなけなしの金を漁り、あることを確認してから煙草を片手にひょいとつまんだ。
「飲みなおしてぇんだけど、いいバーはねえか？」
「そんなしゃれた場所はないよ。良い子の街だからな」
イツキは肩をすくめて笑ってみせた。男はビールを飲み干しながら「ほらな」と扉を目で示した。
「子どもが一人で入ってこれるほど、ここは平和なのさ」
「なるほどねえ」
男と同じく扉を見ると、赤いマントを羽織った小さな少女が一人で堂々と入ってきた。ウエイトレスへの対応も中々のもので、手馴れた様子で席に着いてあれやこれやと注文している。
「親同伴じゃなくても十分ってことか」
イツキはぼやきながら立ち上がり、サンドワームの男は片手をあげながら二杯目のビールに手をつけた。イツキの席には他の客が座り、賑わう声の中ふらりと外に出た。隙間を縫い、その後姿を目で追う者がいるとは知らずに。
外はすっかり夜に変わっていた。踊る砂たちは冷たい空気の中、しんと静まり返っている。
そのまま街を回って見たが、確かにバーはなく、食堂以外に明かりのついている店はなかった。民家だけが穏やかな光を湛えている。ほのかに甘い香りが漂い、一時の夢に似ていた。
しかたなく宿に入ったが、運悪く満室だった。
「すまないね。どういうわけか、今日は満員なんだ」
蓮っ葉な老婆はそう言い放つと手を振りながら奥の部屋へ入ってしまった。イツキは舌打ち交じりに外に出て、煙草を取り出した。つぶれた箱から甘い匂いが溢れる。アップルの味らしいが、生ぬるい甘みがあるだけだ。
手をかざし、火をつける。オレンジ色にじんわりと付き、ゆっくりと吸い込んだ。肺は甘い味に満たされる。白い煙と共に吐き出し、空を仰いだ。四散する煙を追う様に目を細め、月を探したが今日はないようだ。
野宿以外ないだろうか。女を捜したほうがいいだろうか。
そんな事を考えながらもぽつぽつと歩く。すれ違う人はなく、静かな壁だけが並び続けた。